



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	学習指導要領の改訂と中高一貫校における地理学習（地理教育シンポジウム）(fulltext)
Author(s)	鉄川,敬史
Citation	学芸地理(68): 36-39
Issue Date	2013-07-31
URL	http://hdl.handle.net/2309/134213
Publisher	東京学芸大学地理学会
Rights	

学習指導要領の改訂と中高一貫校における地理学習

鉄川 敬史*

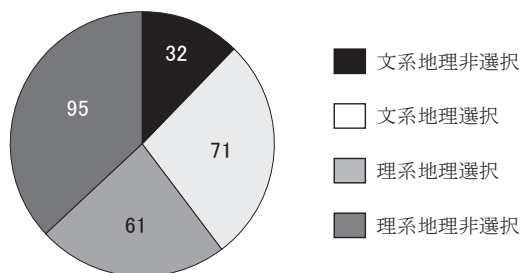
キーワード：中高一貫教育，系統地理学，大学受験，授業実践

私立巣鴨中・高校の鉄川です。プリントの一枚目に巣鴨中・高校でどういう授業を行っているかを大まかにまとめさせていただきました。本校で地理は中1，中3，高1に開設され，それぞれ必修2単位です。高3では選択授業となり，文系は週5時間，理系が週4時間です。なお，今年度の高3では，文系で約3分の2，理系で約3分の1の生徒が選択しています。

本校での地理の学習は，高校の地理Bの内容を中1から取り入れていきます。前々回の学習指導要領までは本校でも中1で地誌学の内容を中心にしていたのですが，平成10年の指導要領改訂の時に，学習内容をどうしようかと悩みまして，中1から高校地理Bの内容（やや系統地理的）を取り入れることにしました。実際，中

第1表 巣鴨中学校・高等学校の地理授業計画

学年	単位	内 容
中1	2	地図学 地形学 気候学
中3	2	農業地理学 鉱業地理学 工業地理学
高1	2	地域開発論 環境問題 交通地理学 都市地理学 人口地理学 文化地理学 地誌学
高3 選択	文系5 理系4	系統地理学の復習・演習



第1図 2012年度高3の地理選択状況

第2表 中3農業地理学（2012年度の授業）

学 期	内 容	既存の学習から	将来の内容へ
1 学期前半	集約度と生産性		→工業地理学
	農業の起源と伝播		→文化地理学
	三大穀物について		→文化地理学
	ホイットルセイの農業地域区分	←気候学	
	自給的農業	←気候学・地形学	→環境問題・人口地理学
1 学期後半	企業的農業	←気候学・地形学	→環境問題
	商業的農業-混合農業	←気候学・地形学	
2 学期前半	商業的農業-酪農、地中海式農業、闊芸農業	←気候学・地形学	
	企業的農業-プランテーション農業	←気候学・地形学	
	モノカルチャー経済		→工業地理学
	チューネンの孤立国		→工業地理学

* 私立巣鴨中・高校教諭（学部39期，院27期）

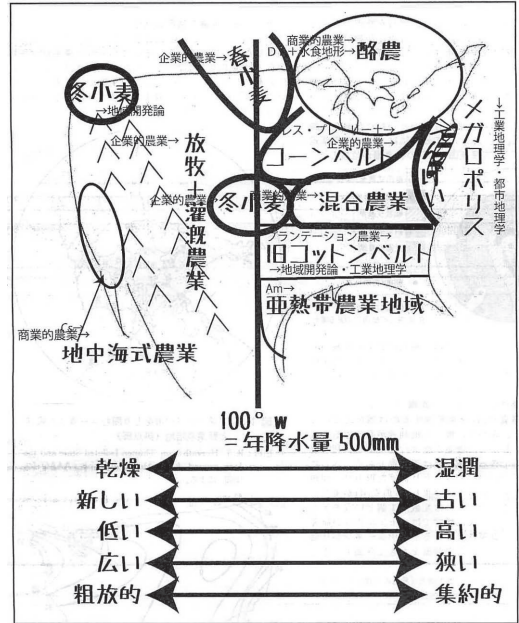
第3表「チューネンの孤立国」単元計画

時間	内容
1	チューネンの孤立国とは 地代曲線 同心円構造 チューネンの時代のヨーロッパの農業
2	現実との比較 アメリカの農業地域区分

1に高校の内容を教えるとなりますと、中1の段階ではなかなか抽象的なことが分かりにくいので、そこを噛み砕いて、地図を見せて、図・表を使いながら丹念にやっていきます。今ちょうど気候学に入ったところですが、ケッペンの気候区分についても、気温と雨の降り方の関係、気候区分と大陸との関係など、いろいろな角度から教えていくわけです。こうした中1時の学習は、中3時の学習を通じて具体性を持って復習されると同時に、生徒自身で中3時の学習内容を導き出すヒントになっていくのです。

今年度は、時数の関係などから、農業立地論を農業地理学のみとめとして教えることになりました。まず第1時間目に、坂本英夫・浜谷真人編『最近の地理学』（古今書院、1985）の中の「チューネンの孤立国」を参考にして、「チューネン理論」を地代曲線のでき方から説明し、農業の立地が同心円構造になることを説明しました。第2時間目に具体的にチューネンの時代にはどのような農業が行われていたか、それらは現在の農業では、どの農業にあたるかについて説明します。以前の学習で混合農業などについては説明していましたが、土地の「休閒」の意味、そこがどのような土地利用に変化していくのかなど、生徒は比較的スムーズに理解したようです。

そして第3時間目として、実際の農業地域はどのように分化しているのか、前掲書にあったアメリカ合衆国の農業の純収益の等値線を利用



資料1 アメリカの農業地域の授業資料

して、チューネン圏と実際の農業地域区分との比較を行いました。理論的な孤立国と、メガロポリスを中心として同心円状に引かれた収益等値線を比較することで、「アメリカ合衆国は孤立していないのに」、「自然環境は同一でないのに」と、生徒は理論と現実を見て考えます。

この主題の提示後に黒板にアメリカ合衆国の地図を書き、チューネン圏に登場しない酪農、地中海式農業、コットンベルト、亜熱帯農業地域を記入します。この4つの地域の復習を通じて生徒は、酪農地域は氷食地域のところだ、寒い場所だ、地中海式農業地域のところはCs気候だと気づきはじめます。中3時の農業地理の学習だけでなく、中1時の自然地理学の学習が活きてきて、生徒は「こういう条件があるから、こうなっているのではないか」と地図の上で自ら既習事項を引き出していきます。つづいて、チューネン圏にある園芸農業、混合農業、企業の穀物農業、企業の牧畜業地域を先ほどの地図

上に記入し、この配列になっている理由を考えます。その際、既習事項を思い出しやすくするために、地図上に西経100度の線を引き、湿潤気候と乾燥気候における農業の違い、企業的農業の学習で説明したアメリカ合衆国の植民地化の過程や西部開拓などの歴史的事項、人口密度なども考えさせながら、結果としてアメリカ東海岸が集約的であり、西はグレートプレーンズの辺りまで粗放的になっていくことを引き出させていきます。そして、アメリカ合衆国の農業地域の分布と同様な配列がオーストラリアやアルゼンチンでも見られることもあわせて話します。「現実はこちらだ、ではなぜそうなるのか」、この思考過程を通じて、生徒は資料集や教科書に書いてある条件以外に、もっと様々な条件が組み合わさって、それぞれの地域に働いているからではないか、と考えるようになってくれました。

私は、年度初めの授業で「私は神様ではない。すべての知識をあなた達にあげることなんて絶対に無理だ。だから自分で考えられるようにならないといけない」と話します。将来的には、生徒は様々な知識や情報に対して、情報端末を使って簡単にアクセスできるようになるかもしれませんが。こうした時代性を踏まえると、地理の学習は、単に知識や情報だけでなく、それらを場所(土地)と結びつけ、なぜ、それが、その場所に存在するのか、その場所で発生しているのか、を生徒自身が考えていけるように仕向けていくことだと思います。そして教員には、生徒がいろいろな要素を地理的事象に結びつける場面において、すでに得ている知識・情報を引っ張り出しやすいように事前に種をまいておくが必要になると思うのです。それは推理小説にみられるように、問題発生あるいは解決のための伏線を張っておくことと同様です。中1の段階で、この内容は中3以降のどの

学習で利用されやすいかを考え、内容の説明と同時に、それが後の学習内容にリンクするのだということを話題にしたり、先の学習内容を軽く説明したりして、生徒の頭の中に「知識の取っ手」になるようなものを作っておきます。そして先の内容の授業において「既存」となった知識を、生徒に引っ張り出させていきます。先に種をまいて、その後刈り取り、また種をまいて、というように生徒に「知識のネットワーク」を構成させていきます。そうやって、生徒は4年間の授業を通じて、地理的事象の分布やその原因などを自分で考えられるようになっていくと考えます。

高3時に地理を選択する生徒は、自分の受験科目として地理をとらえています。いかに生徒が大学入試で得点できるか、これも頭の片方に置きながら中1からの授業を展開しています。本校ではここ1~2年、地理受験をする生徒が増加しており、本年度入試で理系で50人弱、文系でも50人強が受験していますが、近年は大学の入試科目として地理は選択しづらくなってきています。1994年実施の高等学校学習指導要領以降、世界史が必修化され、ここ数年で神奈川県、東京都で日本史必修化が進んでいます。それを受けてなのかわかりませんが、早稲田大学や慶応大学をはじめ多くの大学が地理を受験科目から外しています。私は、本校の受験生のために、1992年以降のセンター試験と東京大学の2次試験の地理の出題について、系統地理・地誌の観点から分類・分析をしています。センター試験はそうでもありませんが、東京大学は入試科目から地理をはずす流れなのかと思ってしまうほど、世界史・日本史と比較して得点しにくい細かい知識の要求、書く分量の増加という傾向がここ数年続いています。

中学や高校で地理を教えたいという思いは、私の場合は生徒に日本や世界のことを分かるよ

第4表 東京大学2次試験の出題形式および量の推移

年	記述	論述1	論述2	論述3	論述行数			
					1	2	3	4
1997	10	7	4	0	0	7	4	0
1998	0	10	2	0	0	7	4	1
1999	12	10	3	0	3	7	3	0
2000	12	6	3	0	0	3	6	0
2001	18	8	3	0	1	6	4	0
2002	12	7	5	0	4	5	2	1
2003	19	6	1	2	0	6	3	0
2004	15	9	3	0	1	6	5	0
2005	11	9	3	3	1	13	1	0
2006	18	7	3	3	1	9	3	0
2007	20	14	3	0	8	7	2	0
2008	20	8	1	2	1	5	4	1
2009	15	12	3	0	1	11	2	1
2010	11	9	7	0	0	8	8	0
2011	13	11	4	0	4	5	1	1
2012	25	12	4	0	1	12	3	0
合計	231	145	52	10	21	100	51	4

注：記述＝用語や記号を解答する問題，論述1＝語群が与えられていない論述問題，論述2＝語群が与えられた論述問題，論述3＝一つの語群で複数の論述を行う問題

資料：東京大学2次試験問題から作成

うになってほしい、というところからきており、前述した「知識のネットワーク」を構成させていくことはその一環です。その一方で、こういう本来的な地理学習のあり方とはずれるにしても、大学入試科目として存在するということが、地理を生徒に学習させる上では大事な方便の一つであり、入試に合格できるようにさせるということも教員の重要な役割になっており、その点でも「知識のネットワーク」の構築は役立っています。

現在進みつつある高校での地理選択者の減少

と地理入試のある大学の減少という悪循環によって中・高一貫校はまだしも、公立では中高間で地理学習が不連続、非効率となり、いっそうの悪循環が生まれてくるのではないのでしょうか。学芸地理学会は小中高大の各校種で活躍している先生が数多くいらっしゃるの、地理を学びたい生徒・学生と、地理を教えたい学生のために、地理学習の必要性とその学習内容の校種間の段階制、連続性における現状と課題を研究し、魅力ある地理教育を発信していく場にしていくことが必要だと思います。

Change of Course of Study and Geography Study in Sugamo Junior and High school

TETSUKAWA Takashi*

Keyword : high school geography, grounding, geography for university examination, teaching practice

*Sugamo Junior and High school